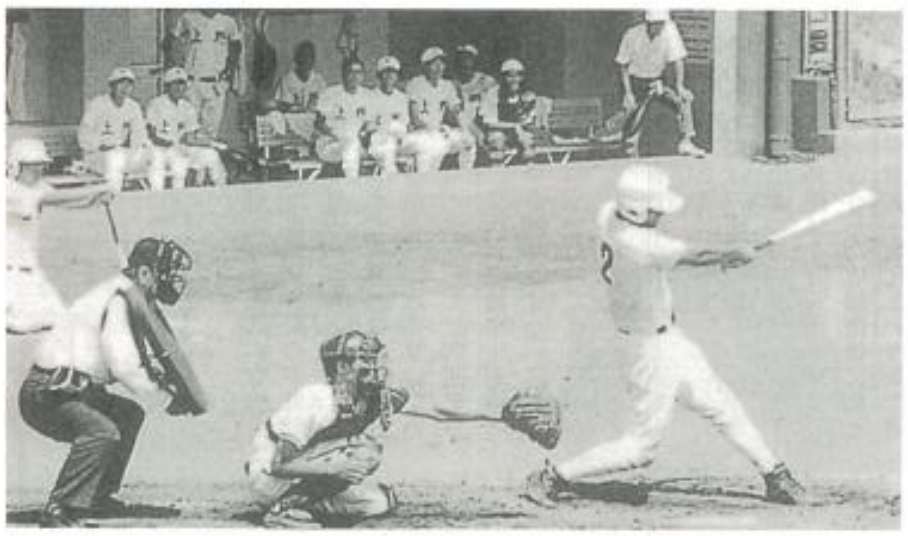
三重県立上野高等学校
同窓会報
VOL.4

白HAKUA亜

事務局：〒518-0873
三重県伊賀市上野丸之内107
上野高等学校内
TEL & FAX：0595－24－2231
ホームページ：
http://www.ict.ne.jp/~hakua/
E-mail：hakua @ ict. ne. jp



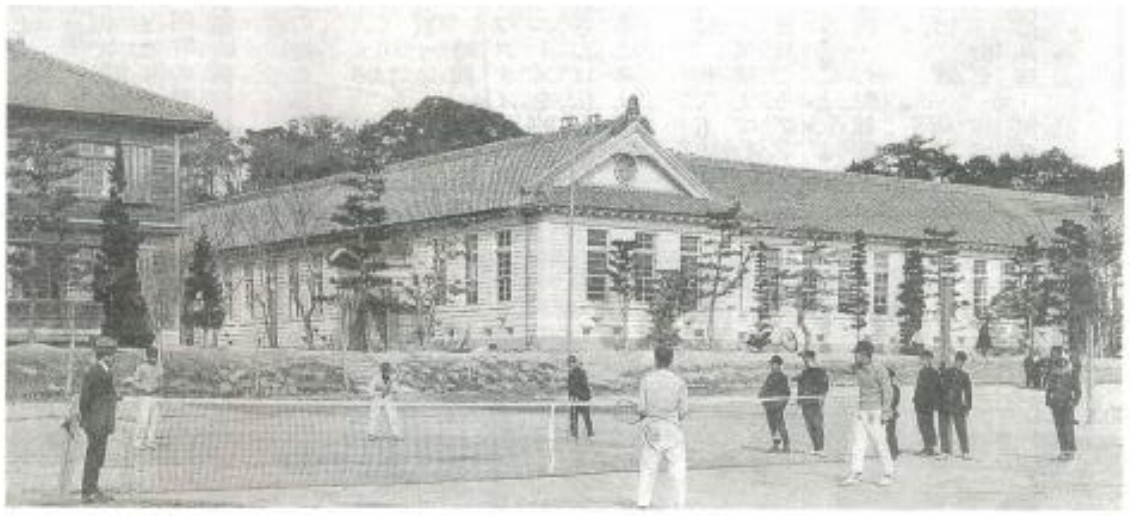
クラブ活動点描

～青春の鼓動が聴こえる～

▼▲▼（創立百周年記念誌「自標」より）

（卒業アルバム2005より）

（2005.4.24　第9回定期演奏会）



ごあいさつ

同窓会長　星　周輔

上野高等学校同窓会員の皆様には、平素から本会の事業活動のために格別のご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、上野高等学校が平成十一年十月に百周年を迎え、盛大に記念式典を挙行して以来、早や五年半が経過致しました。この間に教育制度の改革をはじめ、大きなうねりの波の中で上村学校長をはじめ教職員各位の懸命の努力により、母校上野高校はすばらしい成果を挙げて参りました。このことは我々同窓会員も大変誇らしく心から喜んでいる次第です。

し、上高のOBとして、母校の発展を願わない人はないと思います。従って、我々同窓会は、母校と相互に尊重し合いながら母校の発展のために、今まで以上に協力していかなければならないと思っています。

さて、同窓会員の皆様には今日までいろいろお世話になって参りましたが、これからも同窓会活動に対して年会費制をはじめ、あらゆる面でご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げご挨拶といたします。

学校長　上村桂一

同窓会の皆様には、平素より上野高等学校の教育の振興に格別のご高配を賜り、誠に有難うございます。

さて、上高生は、皆様から自彊不息の精神をしっかりと受け継いで、頑張っています。昨年度も、陸上競技部、ギターマンドリン部、そして吹奏楽部が全国大会に進み、優秀な成績を納めました。申すまでもなく、学業においても上高生は大いに実力を発揮しており、今春も難関とされる大学に合格実績を伸ばしています。

今、変化の激しい時代にあって、子供たちには、基礎基本をしっかりと押えたうえで、自分が立っている位置を見極め、今後進むべき目標を考え、その目標の実現のために主体的に行動する力が求められています。上高生がこのような力を養って社会の発展に貢献する人に育つよう、本校教職員は一丸となって取り組んでいます。

皆様には、本校教育に一層のご支援をお願いいたしますとともに、益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

卒業生インタビュー

JR東海高島屋の新社長に

八尾彰一さん（高14回）

（株）ジェイアール東海高島屋の社長に就任したばかりの八尾彰一氏にお聞きした。

―名古屋の街の印象は？

ひと言で言うなら、「甲斐性のある街」という印象です。そうした地域で新たに事業を展開していくために、在来との差別化・特色化ということを心懸けて、名古屋における百貨店経営につとめています。

また、名古屋はいま中部国際空港や愛知万博でとても活気があります。その根底には、トヨタを中心とした名古屋経済の元気ぶりがあります。ただ、名古屋はもともとメーカーの町であり、高コストを理由に、そうした工場が海外へと転出し、その跡地には、もっぱらショッピングセンターが造られています。こうしたことは、日本の構造変化として受け止めなくてはなりません。

―ジェイアール東海高島屋について聞かせてください。

当社は、平成8年に設立されたJR東海と高島屋との合弁会社です。立地としては、名古屋駅のJRセントラルタワーズの中にあり、申し分ありませんが、それに甘んじることなく、「名古屋で新しいもの、ないもの」を追求していかなければいけないと考えています。それは決して難しいことを考えるのではなく、これまで他の高島屋でやってきたことを持ち込むだけでも新鮮味を発揮できます。

また、文化的催しなど集客の企画も積極的に行っています。各階の中央やニスカレーター付近にレストスペースを設け、ちょっとした休憩などに使ってもらうというのも、これまでにない感覚のものです。こうした、空間をきちんとつくる。また、混雑や圧迫感といったストレスを感じさせない店づくりが大切ですね。物だけでなく時間や空間を味わうということ、ライフスタイルの提案が百貨店が生き残る道とも言えるのです。

そのためには、店舗面積も5万平米以上は必要だと思っています。ジェイアール東海高島屋は5万5千平米を有しています。こうした店舗面積に加えて、ファッション・文化という面で違いを出し、ショッピングセンターとの棲み分けも行っているのです。

―高校卒業から高島屋一筋という、たたき上げの人生を歩んでこられましたが、高島屋での今日までを簡単に教えてください。

最初は大阪難波にある大阪店の生鮮食料品売場から始まりました。21歳の時に子会社の配送会社への出向を経験しました。その後、労働組合の活動が長かったので、全体を見る上でよい機会に恵まれたと思っています。営業を中心にこなして、平成10年に大阪店副店長になりました。その時、平成12年3月開店予定のジェイアール東海高島屋の開業準備を手伝ったのが、名古屋と関わるきっかけです。平成11年、高島屋は業務を店単独から東日本・西日本で一括集中化させました。それに伴って、関西事業部MD統括本部副本部長となり、平成13・14年の2カ年は、大阪店長を勤めました。そして平成15年、専務として名古屋に移りました。

―後輩を指導していくコツは？

少し古くさいと思われるかも知れませんが、山本五十六の「やって見せ、言って聞かせて、させてみて、褒めてやらねば人は動かじ」を座右の銘としています。部下にも目標を持たせてさせてみて、最終的な責任は自分がとるという考え方が大事です。マネージメントの上で、「見てくれている」、あるいは「見られている」ということが必要なのです。

―上高時代の思い出は？

今から考えると、3年間を自由奔放に過ごしました。1限目必ず遅刻するので、桑町から勤めていた松岡禮一先生が三之町まで起こしに来てくれるんです。ただ、逆学コースに在籍して、室長も務めたことがあります。いずれにしても、違ったことをするという考え方を持っていたと思います。

また、歴史が好きで、ずっと「10」をとろうと努力したことも記憶に残っています。

どちらかといえば硬派で過ごしましたが、いまと違って、おおらかで楽しく過ごせましたし、「阿吽の呼吸」ともいうべき教師との信頼関係が築けていましたね。

―最後に、これからの抱負を聞かせてください。

これからの百貨店づくりは、物だけでなく事（シーン）も売買するということにつきると思います。時間・空間を味わってもらい、ライフスタイルの提案をする。お客さんのニーズを的確にとらえて、欲求がお客さんに伝わる店づくりをする必要があると考えています。

また、後輩に対しては、何でもトライしようという心意気・気構えで行かなければいけないと、常日ごろアドバイスしています。そうすることによって、はじめて自らの志向・行動範囲が広がるのですよ。

構成　増田　雄・高42回
取材　福田和幸・高18回
　　池澤基善・高19回
　　奥谷和久・高38回

プロフィール

やおしょういち　さん
(株)ジェイアール東海高島屋社長。
旧上野市出身。上野高校14回卒。
高校卒業後、昭和38年高島屋入社。高島屋大阪店長などを経て、平成15年から平成17年までジェイアール東海高島屋専務。

パプアから伊賀をみつめて

小坂恵敬さん（高41回）

オーストラリア国立大学の大学院博士課程で文化人類学を専攻している小坂さんはいま、一年以上パプアニューギニアで調査を続けている。

そこではなんと今も貝のお金（貝貨）が使われているそうだ。伝統的な貝貨が、現在もどんな意義を持って使われているのかが研究テーマ。

様々な貝貨を型なるモノとして大切に扱ってきたパプアニューギニアの人々は、冠婚葬祭などの重要な場で大切な貝貨を贈るそうだ。したがって、貝貨の研究は、この社会の人と人とのつながりを理解することだという。

小坂さんの調査地は、太平洋戦争中の軍歌で知られたラバウルの近く。ここに住むトーライ族は、たくさんの小さな貝を篠に通した紐状の貝貨（タブ）を使っている。これは普段の生活でも使われている。そして近年は税金・学費などの公共サービスの支払い手段としても認められ、「貝貨銀行」までできるなど、他の貝貨にはない新しい使われ方が見られるという。その背景を検討し、それがトーライ社会の人間関係をどのように反映しているのかについて探ろうというのが、小坂さんのねらいだという。

二〇代半ばに一年ほどニュージーランドへ旅行した。そこで見た日本とは「違う世界」をよく見、考え、書きたいという思いに到り、そこで出会ったのが文化人類学。彼が今の研究の道に進むことになったきっかけである。

「今まで見たことも、聞いたこともない事実に触れた時が楽しい、というより興奮しますね」。それを上手く表現することは難しいがその楽しさをもっと味わいたいという。

▲現地の人たちの踊りの輪に

日本では馴染みの薄いパプアニューギニアの生活。彼は現地で"ホームステイ"し、食事はバナナが主食。それをココナッツミルクで煮たものが多く、そこに魚や鶏や豚が入ることもある。お米もココナッツミルクを入れて炊く。果物はマンゴやパイナップルがおいしく、飽きるほど食べることができる。ただマンゴは漆科の植物なので食べ過ぎるとアレルギーが出ることもあるので要注意だそうだ。

今後は、現在の調査を終えて博士論文をまとめることになる。そして大学など研究機関への就職口を見つけたいとのこと。「できれば次のテーマは日本人、特に"伊賀人"について海外から考えていきたい」と思っている。

パプアニューギニアと並んで「伊賀人」を文化人類学的に考察する研究の成果を大いに期待したいものです。

（通信手段の難しいパプアニューギニアからの電子メールをもとに構成）

（増田　雄・高42回）

卒業生追跡レポート

地域へエールを送る応援団長

福森浩太さん（高53回）

この8月20日（土）に、伊賀上野で行われる「市民夏のにぎわいフェスタ二〇〇五」に三重大学の応援団が参加する。その団長をつとめているのが福森浩太さん（教育学部情報教育課程情報処理コース）。

せっかく大学に入ったのだから、一つくらい大きなことをしてみたい、と決心のいる応援団を選んだ。

三重大学応援団の活動目標は、大学の総合活性化（活動を通じて大学を良くしようというもの）と、クラブ・サークルの応援・壮行、そして、地域社会の応援という三つ。20年前、初代の団長が、三重大学の学生は地方大学のせいか、おとなしいので、自分の手で明るく楽しい大学にしようと、創設したそうだ。このことが、活動目標の一つ目に反映されている。

▲エールを送る凛々しい姿

応援団はリーダー部・ブラスバンド部・チアリーダー部が三位一体となっている。昨今、他大学では応援団の衰退が言われているが、三重大学では男女合わせて62名の団員を擁して国公立大学では全国1位。土・日の大半は応援やステージがあるという。

特に今年度は、「地域進出元年」と銘打って、地域の祭りや町おこしに積極的に参加している。こうした、いわゆる「応援」以外の活動が団員数を多くしているようだ。これまで、津祭のほか伊賀地域でも昨年は名張市の箕曲小学校へ招かれている。

団長に求められているのは「一言で言うなら、長い目で先を見通して判断すること」と考え、伝統を守りながらも、常に新しいことに挑戦するということを大事にしている。

他大学の学生との交流など、普通の学生ができない経験をたくさん積むことができるという。

上高時代も友人が多く、活発な生徒だったと自分でも思っている。「三重大学の先輩でもある数学の西田芳文先生や書道の松井千夏先生には仲良くしていただいたという印象ですね」。「ちょうど創立百周年の年に入学しましたので、伝統と誇りというものを感じています」という。

今後は、伊賀にもどって就職し、これまでの経験を地域に還元していきたいという彼からのメッセージ…

「8月の"市民フェスタ"では私たち60余名の団員が、精一杯伊賀市にエールを送らせていただきます。期待していてください」。

（木宮康介・高41回　増田雄・高42回）

懐かしの先生をたずねて

永遠の文学少女　森川芙美子先生（高5回）

先生は、昭和33年から平成８年まで38年間の教師生活の内、二度にわたり通算29年間を母校でもある上野高校で勤務された。高校生時代は「おとなしい生徒でしたよ。」三年生の時受け持ってもらった山田先生に薦められ、奈良女子大学へ。前身が女子高等師範学校だったので、教師になったのは自然の流れであったようだ。

長島高校を振り出しに、５年後上野高校へ国語の教師として赴任する。初めての担任を終えた時、生徒から「先生ようやったな」と褒めてもらったそうだ。「よほど頼りない教師やと、生徒には映ったんやろね。」若い女性の教師の担任は数少ない時代だった。この頃は、夏休みなどに、クラスやクラブ単位で飯盒炊飯をしたり、文芸部の生徒と阿波の大仏さんや猿蓑塚に行ったことも。しかしこの間に、家庭ではお母さんが倒れられ、その後17年間、先生がお世話することになる。

二度目の定時制勤務の時、クラスの生徒を家に招いたことがあった。年齢の異なる生徒達が全員出席し、ちらし寿司で歓待したが、それでもなかなか腰が上がらず、女子生徒を動員して急遽カレーを作ったとか。38年間「話の通じる人達とお付き合いできました。」とおっしゃって下さったが、最近の生徒では手に余るとお考えなのだろうか。どこかに開放したところをお持ちの先生には、この頃の生徒にも話は通じると思われます。

二年前に大病され入院されたが、１年後にはメキシコへ。51歳の時にシルクロードを巡ったことが海外旅行へのきっかけとなり、退職後は年に二回のペースで出かけられる。単に観光ではなく、「インカ文明やケルト族のことが知りたくて」と旅にもこだわりがある。退職前から続けられている「源氏の会」（濱川先生講師）、ＮＨＫの古文書の通信教育の受講等々、古典の世界にも遊ばれている。また周りに高校・大学時代同窓の、職場を通じての、と友人にも恵まれて、悠々自適の毎日を過ごされている。

（安屋宣子・高19回）

曽我さん一家の受け入れも

ジャカルタ大使館員　清原宏真さん（高39回）

卒業生追跡レポート

昨年７月、曽我ひとみさんが夫ジェンキンスさんと娘さんを迎えたのはジャカルタ。その日本大使館員の一人として対応に当ったのが清原宏真さん。

６月下旬頃から「もしかしたら」という雰囲気があったが７月に入って正式にジャカルタで、と決まった時も「大使や領事は大変だろうなぁ」くらいの感覚だった。が、実際には総動員態勢となり、出張予定があったが急遽「配車係」に。曽我さん一家だけでなく関係者のスケジュールもすべて把握した上で、車の手配をするのは至難の業。メディアも多数押し寄せていたが、ある程度「絵を撮らせてあげるように」して情報を提供すれば、無理な取材をしないことがわかった。二週間ほどの滞在で、家族全員が日本に帰れてよかったが、もし長引くことになれば、バリへの移動を考えなくてはならなかったのかもしれないとか。

この清原さん、実は意外な経歴の持ち主。名古屋市立大学薬学部で学び、実家がお寺のため僧職の資格も持っている。大学院を出て厚生省（当時）に入り、薬価を決める仕事に就く。その後、科学技術庁（当時）国際課に出向、更に外務省に出向して〇三年６月にジャカルタの日本大使館に赴任。

担当の仕事は過密だ。アチェ臨時事務所では現地邦人のサポートが主だが、ここはあの大地震と津波の被災地。震災の後は、復興のための業務に追われている。宿舎にはお湯がないので、「水浴び」しかできない。年始の1月2日、家族と休暇でバースにいた時、ユドヨノ大統領の発案で「津波サミット」を六日に開くとの連絡を受け、翌日ジャカルタに戻って早速業務に復帰した。

アジアアフリカ会議では、首脳の宿泊先と決まったホテルへ、家族でブランチを食べに出かける。今回も配車係を予測して事前の下見。ところが、今回はアチェで小泉総理大臣の受け入れ態勢を整える役割に。が、結局、経験のある配車係が必要と、ジャカルタに呼び戻された。ゆっくり眠れたのは４日間でトータル数時間だった

また、パプアニューギニアでは、旧日本軍兵士の遺骨収集のためにジャングルの中に入ることもある。日本の厚生労働省の事業で時々調査団がやってきて現地の人を雇うが、政情不安のため、土地の有力者の協力を取り付けるのがコツだとか。ここでは、元日本兵の生存情報は「全く聞かない」そうだ。

日本からの官僚や国会議員の案内も大事な仕事だ。ある国会議員を足ツボマッサージ店に案内したが足のツボの位置を説明したポスターを見ながら、インドネシア語を覚えようとしている議員の姿が印象的だったとのこと。

インドネシアについては、「これだけ広い国のほぼ全土で同一言語が通じ、意思疎通ができるというのは大きな可能性を秘めている。一方、価値観も統一されると多様な文化が守れるか心配」だとか。そして「この国の人たちの思考のキーワードはTidak apa apa（問題ない）とKira Kira（だいたい）。マイナス思考をする人はぜひ一度インドネシアで暮らしてみてください」。

（ジャカルタ在住の森永泰生・高45回が取材、構成は福田和幸・高18回）

ジャカルタの上高同窓生。左から清原さん、森永泰生さん、竹岡由貴さん（高43回・青年海外協力隊員として今年3月まで滞在）、各務弘一さん（高39回・化粧品の「マンダム」ジャカルタ駐在）

打楽器の独奏や音楽教育も

札幌交響楽団　大垣内英伸さん（高32回）

昨年夏、私は一人の打楽器奏者の演奏を聞くため上野市文化会館での『伊賀びとコンサート』に出掛けた。

演奏が始まった。曲は『無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ』。このバッハの名曲をマリンバ（木琴の親分のような楽器）だけで演奏する事が可能なのかとの疑問は見事に打ち砕かれ、その瞬間これがプロの演奏なのだと感動させられた。

舞台上の彼はマリンバ相手に四本のマレットを自在に操り、左右別の動作の出来ない私にとっては、神業としか思えない演奏を繰り広げていた……

彼の名は、大垣内英伸さん。

兄の影響で吹奏楽、中でもドラムに目覚め、高校入学後すぐ吹奏楽部に。しかし、当時の吹奏楽部にはドラムセットがなく、クラシックが主なレパートリー。先輩たちからドラムセット以外の打楽器のおもしろさ、難しさを教えられ、いつの間にかクラシックの打楽器奏者になることを決意する。

寮に入っていた彼は、芸大受験のため、夜中にこっそりと音楽室でピアノの練習したこともあったとか。

親に迷惑をかけまいと東京で赤貧の浪人生活に耐えた。その努力と才能に神が味方し、東京芸大に合格、打楽器を専攻した。卒業後は、フリーの活動を経て大阪市音楽団に身を置いた後、九三年に札幌交響楽団（札響）の打楽器奏者に選ばれた。

オーケストラではほとんどの打楽器を受け持つが、その他にもゲーム音楽等の作曲も手掛けている。また、札響のワークショップ形式の音楽教育プログラム作成のリーダーとして活躍中。「子供達の感受性、表現力の育成だけではなく、楽器を通じて人の絆が広がっていくのが文化ではないか」と彼はいう。

家では時折娘さんとピアノの連弾をするお父さんだが、私の脳裏に浮かぶ高校生の彼は、誰もが女生徒と疑わなかった仮装行列の時のセーラー服姿。また、合唱コンクールの練習で、あっと言う間に曲を仕上げてくれた時の驚き。今にして思えば、後に音楽家になる「前兆」だったのかも。『伊賀びと・・・』の折、吹奏楽部の後輩を指導して「僕の人生の一部はこの地と共にあったんだ」としみじみ感じたそうだ。

クラシック音楽は、「わかる」「わからない」ではなく、食べ物のように「好き」か「嫌い」だと彼は言う。もしもあなたがクラシックの世界に馴染みがないのなら、まず、生演奏をぜひ。

四年ほど前から、習っているヴァイオリンを、定年後、アマチュアのオーケストラで演奏するのが夢だそうだ。彼の人生のレールは、どこまでも音楽と繋がっている。（米岡広美・高32回）

札幌交響楽団（http://sso.or.jp）

ジャズという音楽の楽しさ、魅力を伝えたい

ジャズピアニスト　福森道華さん（高38回）

愛知県立芸術大学卒業後、ニューヨーク市立大学大学院でジャズピアノを学んで二〇〇三年からジャズピアニストとしてニューヨークで本格的に演奏活動を開始した福森道華さん。友人たちが企画したふるさとでの演奏会が、昨年８月30日（月）に伊賀市の「ピアノフォーラム」で開かれた。この日、日本列島は台風の襲来を受けたが、会場内では素晴らしい演奏が繰り広げられ、悪天を忘れつめかけた聴衆は、大いに魅了された。

Photo by Takehiko Tokiwa

ピアノを始めたきっかけは、家にピアノがあったので、お母さんが音楽教室に連れていったこと。「それ以来、音楽は、"人生の相棒"といった感じ。というのも、自分の生き方が音に反映されると思っているから。しかし、益々音楽の奥深さを感じる毎日です。」

高校時代の思い出は、苦手な数学に悩まされ続けたこと。中でも、大量の宿題を徹夜でやって、翌日のマラソン大会ではフラフラになって走ったことや、成績のことで先生から声がかかると、ビクビクしていたことは忘れられない。音大に進学後、さすがにもう数学とは無縁だろうと思っていたら、担当の教授に「音楽には数学的な頭脳と考え方が不可欠だ」と言われ、目の前が真っ暗になった。

クラブはやはり吹奏楽部。３年間活動し、同学年の部員が仲良しだったこともあり、とても良い思い出だそう。「上高の校風は中学時代とは違い、自由で、しかし、その分責任を持たないといけない、そんな雰囲気がありとても好きだった。どこか大人になったような気がした。最も生き生きしていた三年間だったと思う。」とのことです。

昨年のツアーに続き、今年も9月11日（日）、伊賀市の「前田教育会館」での公演を皮切りに、関西や東京方面で、ピアノトリオ・ツアーを行う予定。

"吾等の望み山々を越えて溢れて外に出ん"を心の指標にしているそうだ。

今後の活動等について詳しくは、福森さんのホームページをどうぞ。

（http://www.michika.jp）

（服部秀一・高38回）

上野高校近況

昨年11月に上野市、阿山郡、名賀郡の市町村が合併して伊賀市が誕生しました。その伊賀市で。上野という名が残った上野城、上野市駅、そして上野高校周辺で、4月頃より土・日曜日ともなれば・家族づれの忍者が幾組も出没しています。NINJAフェスタもあり、観光で訪れた人たちが忍者の衣装を借りて街を巡っているのです。聞くところによると犬の衣装まであるそうです。

私たちはその上野城の石垣や天守閣を今日も学校から眺めています。どっしりとしていて、色々なことがある毎日ですが、しばし心を落ち着かせてくれます。旅をしていると、各地の城のそばに高校があるのをよく見かけます。弘前、彦根、そして唐津に。唐津城の石段を登っていると、トレーニングをしていた高校の野球部だと思われる生徒が、観光客の私たちにも挨拶をしてくれたことを思い出します。高校に勤務している者としては、旅に出るとその地の生徒の様子が気になってしまいます。伊賀を訪れた人たちや街の人たちの目には、本校の生徒はどのように映っているのでしょうか。

毎日の登下校の様子や、校外でのクラブの試合、演奏会、展覧会等で、同窓生の皆様がお気付きになられたことがございましたら、生徒たちに声をかけてやってください。皆様に注目されているということが励みにもなると思われます。運動部も文化部も伝統の上に活躍していますが、またひとつよき伝統の芽生えが感じられる部が写真部です。「写真の甲子園」と言われている全国大会に、近年出場を果たしました。

朝の登校時からクラブ活動を終えて帰途につくまで、生徒たちの顔や声に生き生きとしたところを発見することほど、学校にいて気持ちのよいことはありません。クラブ活動時はもちろん、授業での顔の輝きも期待して今朝も校門を入ります。

（市岡千明・高19回）

平成15年度
（平成15年9月1日～平成16年8月31日）
三重県立上野高等学校同窓会名簿特別会計収支決算書

1．収入の部　（単位：円）

科目	決算額
1．前年度繰越金	703,652
2．売上高	15,000
3．雑収入	6
合計	718,658

2．支出の部

科目	決算額
1．会議費	0
2．通信運搬費	0
3．払込料金	0
4．製本・印刷費	0
5．積立金	0
6．予備費	0
小計	0
次期繰越金	718,658
合計	718,658

平成15年度
（平成15年8月1日～平成16年8月31日）
三重県立上野高等学校同窓会百周年記念事業（募金）特別会計収支決算書

1．収入の部　（単位：円）

科目	決算額
1．前年度繰越金	443,690
2．記念誌売上高	0
3．寄付金	0
4．雑収入	4
合計	443,694

2．支出の部

科目	決算額
1．会議費	0
2．印刷費	0
3．記念誌等製作費	0
4．百周年記念事業準備費	0
5．記念モニュメント制作費	0
6．記念碑建立	0
7．事務用備品費	0
8．積立金	0
9．予備費	0
小計	0
次期繰越金	443,694
合計	443,694

平成16年度
（平成16年9月1日～平成17年8月31日）
三重県立上野高等学校同窓会名簿特別会計収支予算書

1．収入の部　（単位：円）

科目	本年度予算額 A	前年度実績額 B	対比 A－B
1．前年度繰越金	718,658	703,652	15,006
2．売上高	20,000	100,000	△80,000
3．雑収入	2	23	△21
合計	738,660	803,675	△65,015

2．支出の部

科目	本年度予算額 A	前年度実績額 B	対比 A－B
1．会議費	0	0	0
2．通信運搬費	10,000	10,000	0
3．払込料金	0	0	0
4．製本・印刷費	0	0	0
5．積立金	700,000	750,000	△50,000
6．予備費	28,660	43,675	△15,015
合計	738,660	803,675	△65,015

平成16年度
（平成16年9月1日～平成17年8月31日）
三重県立上野高等学校同窓会百周年記念事業（募金）特別会計収支予算書

1．収入の部　（単位：円）

科目	本年度予算額 A	前年度実績額 B	対比 A－B
1．前年度繰越金	443,694	443,690	4
2．記念誌売上高	30,000	30,000	0
3．寄付金	0	0	0
4．雑収入	6	20	△14
合計	473,700	473,710	△10

2．支出の部

科目	本年度予算額 A	前年度実績額 B	対比 A－B
1．会議費	0	0	0
2．印刷費	0	0	0
3．記念誌等製作費	10,000	10,000	0
4．百周年記念事業準備費	400,000	400,000	0
5．記念モニュメント制作費	30,000	30,000	0
6．記念碑建立	0	0	0
7．事務用備品費	0	0	0
8．積立金	0	0	0
9．予備費	33,700	33,710	△10
合計	473,700	473,710	△10

平成15年度（平成15年9月1日～平成16年8月31日）
三重県立上野高等学校同窓会一般会計収支決算書

1．収入の部　（単位：円）

科目	予算額	決算額	対予算比
1．前年度繰越金	4,282,875	4,282,875	0
2．入会金	3,650,000	3,650,000	0
3．年会費	6,200,000	5,210,000	△990,000
本年度分会費	6,000,000	4,264,000	△1,736,000
過年度会費	200,000	946,000	746,000
4．雑収入	200,125	277,037	76,912
合計	14,333,000	13,419,912	△913,088

2．支出の部

科目	予算額	決算額	対予算比
1．会議費	960,000	872,975	12,975
総会費	800,000	886,254	86,254
諸会議費	160,000	86,722	△73,278
2．通信費	2,500,000	2,034,703	△465,297
事務局人件費	600,000	581,250	△8,750
事務消耗品費	80,000	9,123	△80,877
郵送・通信費	500,000	397,370	△102,630
旅費	300,000	182,200	△117,800
渉外・慶弔費	300,000	216,101	△83,899
一般印刷費	400,000	444,412	44,412
払込手数料費	260,000	187,745	△72,255
雑費	50,000	6,502	△43,498
3．事業費	5,000,000	4,140,774	△859,226
a)会報発行費	4,400,000	3,867,864	△532,136
会報編集費	100,000	890	△99,110
会報印刷費	2,000,000	1,849,470	△150,530
会報封入費等	300,000	178,227	△121,773
会報郵送費	2,000,000	1,779,277	△220,723
b)講演会等開催費	600,000	332,910	△267,090
講演会費	200,000	0	△200,000
城址祭参加等費用	200,000	236,735	36,735
上野市公園管理費	200,000	96,175	△103,825
4．助成費	2,100,000	1,830,000	△270,000
支部助成費	1,500,000	1,500,000	0
学年同窓会援助費	600,000	330,000	△270,000
5．編纂等特別事業費	100,000	0	△100,000
編纂費	60,000	0	△60,000
印刷費	40,000	0	△40,000
6．学校費	500,000	155,124	△344,876
事務補助費	20,000	0	△20,000
事業補助費	180,000	155,124	△24,876
設備整備補助費	300,000	0	△300,000
7．積立金	2,000,000	0	△2,000,000
積立金	2,000,000	0	△2,000,000
8．予備費	1,173,000	0	△1,173,000
予備費	1,173,000	0	△1,173,000
小計	14,333,000	9,133,577	△5,199,423
次期繰越金		4,286,335	4,286,335
合計	14,333,000	13,419,912	△913,088

平成16年度（平成16年9月1日～平成17年8月31日）
三重県立上野高等学校同窓会一般会計収支予算書

1．収入の部　（単位：円）

科目	本年度予算額 A	前年度予算額 B	前年度決算額 C	対比 A－B	対比 A－C
1．前年度繰越金	4,282,875	4,282,875	4,282,875	0	0
2．入会金	3,650,000	3,650,000	3,650,000	0	0
3．年会費	6,200,000	5,600,000	5,210,000	△1,400,000	△410,000
本年度分会費	6,000,000	4,800,000	3,264,000	△1,200,000	△736,000
過年度会費	200,000	800,000	946,000	600,000	746,000
4．雑収入	200,125	200,000	277,037	125	△76,912
合計	14,333,000	13,732,875	13,419,912	△599,125	△312,963

2．支出の部

科目	本年度予算額 A	前年度予算額 B	前年度決算額 C	対比 A－B	対比 A－C
1．会議費	960,000	960,000	872,975	△0,000	△87,025
総会費	800,000	800,000	886,254	0	△86,254
諸会議費	160,000	160,000	86,722	△0,000	73,278
2．通信費	2,210,000	2,500,000	2,034,703	△290,000	175,297
事務局人件費	600,000	600,000	581,250	0	8,750
事務消耗品費	100,000	80,000	9,123	10,000	90,877
郵送・通信費	400,000	500,000	397,370	△100,000	2,630
旅費	200,000	300,000	182,200	△100,000	17,800
渉外・慶弔費	250,000	300,000	216,101	△50,000	33,899
一般印刷費	450,000	400,000	444,412	50,000	5,588
払込手数料費	200,000	260,000	187,745	△60,000	12,255
雑費	10,000	50,000	6,502	△40,000	3,498
3．事業費	4,700,000	5,000,000	4,140,774	△300,000	559,226
a)会報発行費	4,300,000	4,400,000	3,867,864	△100,000	432,136
会報編集費	100,000	100,000	890	0	99,110
会報印刷費	2,000,000	2,000,000	1,849,470	0	150,530
会報封入費等	200,000	300,000	178,227	△100,000	21,773
会報郵送費	2,000,000	2,000,000	1,779,277	0	220,723
b)講演会等開催費	400,000	600,000	332,910	△200,000	67,090
講演会費	100,000	200,000	0	△100,000	100,000
城址祭参加等費用	200,000	200,000	236,735	0	△36,735
上野市公園管理費	100,000	200,000	96,175	△100,000	3,825
4．助成費	1,850,000	2,100,000	1,830,000	△150,000	120,000
支部助成費	1,500,000	500,000	1,500,000	0	0
学年同窓会援助費	450,000	600,000	330,000	△150,000	120,000
5．編纂等特別事業費	50,000	100,000	0	△50,000	50,000
編纂費	30,000	60,000	0	△30,000	30,000
印刷費	20,000	40,000	0	△20,000	20,000
6．学校費	490,000	500,000	155,124	△10,000	334,876
事務補助費	20,000	20,000	0	0	20,000
事業補助費	170,000	180,000	155,124	△10,000	14,876
設備整備補助費	300,000	300,000	0	0	300,000
7．積立金	2,000,000	2,000,000	0	0	2,000,000
積立金	2,000,000	2,000,000	0	0	2,000,000
8．予備費	700,000	1,173,000	0	△473,000	700,000
予備費	700,000	1,173,000	0	△473,000	700,000
次期繰越金			4,286,335		△4,286,335
合計	13,000,000	14,333,000	13,419,912	△1,333,000	△419,912

上高同窓会総会10月8日に開催

平成17年度の総会・講演会・懇親会を左記の通り開催します。お誘い合わせの上、多数ご出席下さいますようよろしくお願いします。受付は当日会場で行いますので、自由にご参加下さい。懇親会参加者には、ささやかなプレゼントをご用意いたします。

（協賛学年…上高5回、11回、15回、25回、35回）

◆日　時　平成17年10月8日（土）
14時より総会　15時より講演会
16時より懇親会

◆会　場　上野フレックスホテル

◆講　師　井上　宏さん（関西大学名誉教授）

◆演　題　『人間と笑い～笑いの力』

講師プロフィール
1936年大阪市生まれ。京都大学文学部哲学科社会学専攻卒業。専攻はメディア社会学、コミュニケーション論、笑い学研究。（現在）関西大学名誉教授、日本笑い学会会長、関西大学非常勤講師、帝塚山大学非常勤講師、（社）生活文化研究所所長、上方漫才大賞審査委員長、上方お笑い大賞審査委員などをつとめる。主な著書に『大阪の文化と笑い』（関西大学出版部、2003）、『笑い学のすすめ』（世界思想社、2004）がある。

人間はなぜ笑うのであろうか。人間ほど笑いを使って生きている動物はない。にもかかわらず、私たちは「笑いの力」についてどれだけのことを認識し、評価してきたであろうか。笑うとスカッとして心が明るくなり、健康にもよさそうだといったことは、生活の知恵として心得てきたが、科学的に知るということになると、殆ど何も解明されてこなかった。笑うと身体の中で何が起こるのか。精神神経系に、免疫系に、内分泌系に、あるいは遺伝子にどんな影響を及ぼすのか、長い間研究がなされてこなかった。近年になって、笑いに対する医学的関心が高まり、笑いが身体内でポジティブな効果を生むという知見がいくつか明らかにされてきた。「元気に生きること」に笑いが深くかかわっている。

急速に変化を遂げる現代社会は、私たちにさまざまなストレスを強いる。環境や仕事の急変、熾烈な競争、複雑化する人間関係など、中でも人間関係のこじれや崩壊は、心を痛く悩ませる。人間関係にとってコミュニケーションが大事だが、仲良くなれるコミュニケーションとはどんなコミュニケーションなのか。笑顔から始まって、互いが笑いあって笑いの感情を共有し合うことが大切だ。個人の権利の主張、個人の欲望の肥大と個人優先が叫ばれるが、その個人も仲間、共同体との仲の良い関係なしには生きてはいけないのである。人間が個体として元気に生きるためにも、仲間と仲良く生きるためにも笑いが欠かせない。

「笑いの力」については、まだまだ解明されてないことが多いのであるが、笑いが人間の心身に与える影響と同時に平和な社会生活を営む上でも重要な営みであることについて語ってみたい。

会費納入のお願い

会員の皆さまにおかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

上野高等学校同窓会は、毎年春の卒業生による新入会員入会金と全会員にお願いしております年会費の合計で運営されています。

ご承知の通り、非常に活発な同窓会活動を行っており、この1年間の主な事業を挙げますと次の通りです。

・同窓会報「白亜」の発行
・ホームページの運営
・一般公開講座（明治校舎で学ぶ「ふるさと伊賀　再発見」パート7）
・「雪解の集い」の後援
・百周年記念施設の維持管理
・東京、名古屋、京阪神支部への支援
・上中会、くれは会、扇の芝会への支援
・各学年同窓会への支援

その他、総会の拡充や会員名簿の管理等行っております。

昨年度分としてご協力いただいた方々は、5月31日現在2、723名で5、446、000円のご支援を賜りました。

上野高等学校同窓会の経済基盤を強固なものにし、母校への支援、会員への情報サービスの充実等、更なる発展を願うものであります。

今年度も年会費（一口2、000円）の納入につきまして、会員皆さま方のご協力、ご支援をよろしくお願い致します。

総会報告

平成16年度の総会は昨年10月3日に上野フレックスホテルにおいて開催されました。前月に行われた役員会・理事会の議案が審議承認されました。総会事項は次の通りです。

◆日時　平成16年10月3日（日）14：00～17：00

◆挨拶　星周補会長　上村桂一学校長

◆来賓　今岡睦之上野市長（現伊賀市長）
山本吉正名古屋支部長
松井昭京阪支部支部長

◆議事　平成15年度事業報告
平成15年度一般会計及び特別会計の決算・監査報告
平成16年度事業計画
平成16年度一般会計及び特別会計予算案

平成15年度会計決算と平成16年度会計予算は上段の通りです。

総会に続いて記念講演会が行われました。

◆演題　『宇宙からの時空間（四次元）情報利用の時代』―カーナビは何故日本が世界一普及しているのか？芭蕉の奥の細道に見る歴史的背景―

◆講師　西口　浩さん（上高9回卒）
衛星測位システム協議会事務局長

◆講演を聴いて

今回の講演では、はじめに地殻変動アニメーションを見ながら、地震国日本にとってGPSが非常に重要性を持つものであるということをわかりやすく説明してくださいました。

そして衛星測位システムの概要に触れながら、日本のカーナビ市場が世界一普及している理由を、芭蕉の『奥の細道』に見る歴史的背景や、伊賀忍者の誰に知られることもなく決定的役割を演じてきた行動が、GPSの有用性と相通じてカーナビの普及に、大きく影響を与えたというお話に、伊賀に関係のあるものにとって、なじみ深い感慨を覚えるものでした。

その他、GPS携帯電話の威力や、カーナビが開く位置情報サービスの世界など、内容の濃いお話に、聴衆者一同感心し、時間がとても短く感じられつつ講演を終了しました。

最後に、お忙しいなかを翌日には本校生のために上野高校体育館で、特別に講演をしていただいたことも付け加えさせていただきます。

（福井　亨・高25回）

白亜 HAKUA おたより おしらせ

第十四回上中会総会を終えて

「際行く駒の足早み　歴史は移る四十年　古き豪に瑞祥の紫雲棚引く我が学府」川崎雄悟作詞、佐々木四郎教諭作曲、福岡友也先生編曲の上中行進曲が、上野高校吹奏楽部により五番まで演奏と合唱が行われた。出席会員は、若かりし中学時代に思いを巡らしながら、一緒に口ずさんだ。吹奏楽部員九十七名が、それぞれの持ち味を生かされ、熱心に演奏や合唱される光景は、高齢者の我々に若いエネルギーを与えてくれた。

第十四回上中会総会は、平成十七年六月五日、ウェル・サンピア伊賀で行われた。参加者は八十三名、八十九才から七十才までの集いであった。十年前には三十九回以上が七割であったのに、今年は四十回以下が七割であった。来年の総会は、十五回の節目なので、特別行事のご意見をお伺いしたい。

上中会だより第十四号は特集で、昭和二十一年四月希望に燃えて、上野中学に入学した四十九回生が、二年二ヶ月で出身の市町村に出来た中学に戻され、一年後には学区制で上野高校に戻れなくなった気の毒な人もいた年であるので、この時の心情を書いて欲しいと話した。また高齢でもお元気な方々より短文でよいからお便りをお願いしたい。

記念講演は元長崎大学教授・東京大学工学博士・大学院環境安全協議会名誉会長の白須賀公平氏で「大仏公害論？　奈良朝は何故短命であったか」の演題だった。勢和村丹生で採掘された水銀を、馬の背にふりわけた朔物に入れて、伊賀の道を通って奈良に運ばれ、アマルガムの水銀を木炭の熱で蒸気として排出した。この水銀が現在日本での蛍光灯年間製造量の十倍の量で奈良の町に排出されたのではないか。また神武天皇の弓に止まった金の鷲を見て金のメッキ技術を持つ技術に恐れ長髄彦が降参したのではないかと面白い構想で話された。専門の見地から現在の環境問題と関連して貴重な内容の濃いお話であった。

後輩達の立派な吹奏楽や合唱に、上中の誇りと楽しい余韻を感じつつ、来年も元気に再会することを誓って散会した。

（上中会長・出後　治）

平成十六年度　くれは部総会

くれは部総会は、平成十六年六月二十日（日）十時三十分よりウエルサンピア伊賀において盛大に開催する事が出来ました。

台風六号の接近で天候が心配されましたが、本日は幸いにも曇りで、時々薄日もさす様子に、天に感謝しつつ受付を開始し、三百名に及ぶ多数の出席者を迎えました。

開会のことばに続いて、小阪部長の挨拶がありました。くれは部の総会は、これを最後とさせて戴くため、内容の充実につとめ、「なつかしの姫小松の校舎全景」「恩師の姿」「昭憲皇太后御歌の額」「針供養」「筆塚」等々の写真を思い出のアルバムとして総会誌に掲載し、又記念品は「阿山高女校章入りのグリーンの小ぶくさ」を用意致しました。皆様のご健康と、今日一日が楽しく心に残る集いになります事をお祈りしつつ会は進められました。

本日来賓としてご出席賜りました

上野高等学校長　上村桂一氏
〃　同窓会長　星　周輔氏
〃　同窓会事務局　福井　亨氏

各氏より丁重なるご祝辞を戴き、有難うございました。

感謝の花束贈呈をさせて戴きました。

次に待望の上野市社会福祉協議会々長　藤田彰信先生による講演「いつまでも美しくすこやかに」を拝聴致しました。先生のご経験に基づくおだやかで、又厳しく滋味あふれるお話は最高でした。お言葉の一つ一つを実践すれば、これからの人生、美しくすこやかに生きて行けそうな感動を覚えました。

昼食は三部屋に分れて楽しく戴き、和やかな話し合いがあちこちで持たれました。

午後は左記の様に進められました。

一、アトラクション
　舞踊　花柳流　花柳幾清社中
　琴演奏　生田流　椿若紫城社中
一、なつかしのメロディー　全員合唱
一、校歌　全員合唱

十五時、閉会のことばがあり、無事終了し、なごりを惜しみつつ散会となりました。

（書記係記）

平成十六年度のあざみ会

阿山高女第三十三回卒業生、阿三三会は、この近年、一年に一度学年会を開いています。今年は十一月五日秋晴の好天に恵まれて、上野シティホテルみやびの和室に二十九名が集いました。阿山高女の宿直室にかかっていた杉風の芭蕉像を、恩師谷總蔵先生が、喜寿の記念に模写されたという軸を掛けて往時を偲びながら、よくしゃべり、よく食べて、気がつくともう二時半、小さな会場で肩寄せあっての一時は、あっという間でした。例年のように校歌を合唱し、一同上気した顔で、来年の阪神方面での再会を約し、喜寿記念の湯呑と千代結を手に散会しました。

クラス会果て余韻を惜しむ夕しぐれ

（当番一同）

阿山高女二十年会

昭和二十年三月卒業の所以で「阿山高女二十年会」と名付けて、毎年学年会を開いております。

本年は津方面にお住いの方々のお世話で、四月十三日湯の山ホテル向陽閣へ集りました。

御在所の山間は桜が見事で、緑の中に丁度満開期を迎えておりました。

大阪、神戸方面から駆けつけて下さったり、上野市内よりはマイクロバスを仕立てて大挙の参加、三十六名の出席となりました。

喜寿を迎えた私達ですが、まだまだ年令を感じさせない美しさとパワーで盛り上り、午後三時「又来年!!」と約して解散しました。

帰路のマイクロバスの中では、余韻に浸りつつ楽しく帰野しました。

（倉阪久子）

白鳳二〇・修学旅行記

昭和五十六年、「三十年振りの修学旅行」の大見出しで紙面を賑わした白鳳二〇、一泊二日旅行会も回を重ねて一二回となる。花の会員も古希とやらもとうに過ぎた。今回は、平成一六年六月六日～七日、洛西名刹、湯の花温泉泊、保津川下りを楽しむことにした。伊賀上野仕立てと、京都駅からのバスが嵐山で合流、卒業以来半世紀ぶりの再会者、この前いつ会ったかな組、毎週のように旅行計画を鳩首してきた面々等、各人付き合い相応の会話を交わしながら先ずは臨済宗天龍寺派大本山、霊亀山天龍資聖禅寺に向かった。修学旅行さながら拝観もそこそこに、明智光秀の敵は本能寺の経路をほぼ逆行して、老の坂、亀山城址を経由、宿泊地、京の奥座敷湯の花温泉渓山閣に夕暮れ時に到着した。

玄関での記念撮影、入浴、宴会、二次会等は恒例通り。ただしこの度は、懇親会冒頭にかねて懸案になっていた本旅行会の今後について提案があり、齢のことは触れたくはないが諸般勘案の上、従来の隔年一泊旅行は今回限りとし、以降は毎年、母校を中心に日帰り可能な場所での昼食会で旧交を温め続けることとした。

ここで、過去十二回の修学旅行史を要約しておきたい。世話役は、上野、名古屋、東京、京阪神各地区の会員輪番制とした。①片山津温泉・金沢②犬山・明治村③箱根湯本温泉・東京NHK見学④大津・京都太秦映画村⑤鳥羽・松島湾巡り⑥還暦記念・館山寺温泉⑦熱海温泉・鎌倉⑧志摩・賢島・伊勢神宮⑨有馬温泉・淡路大橋⑩西浦温泉・知多半島⑪古希記念・西伊豆・堂ケ島温泉⑫湯の花温泉・保津川下り・洛西散策。参加人員は各回、男性57～36名、女性47～32名、累計、男性516名（52%）、女性470名（48%）。喜ばしいことに毎回男女約半々であった。

閑話休題、翌日、心配された梅雨と折から接近して来た台風も大した事なく、保津川下りを満喫した。亀岡から嵐山までの一六キロメートル、約一二〇分、川岸に咲き乱れる躑躅と、濃淡の青葉を愛でつつ、豪快な川面からの水しぶきと、天空からの梅雨に、物理的、精神的に心身を洗い流して全員無事嵐山で下船。計画通りしょうざん庭園にバスで移動して京料理を賞味する。それにしても誰も彼も良く食らい、良く飲んで、貪るように各人の空白期間を埋めるための会話が続く。金閣寺、正しくは鹿苑寺を拝観。スナップ写真を撮りまくったものの、黄金に輝く舎利殿金閣も、名園もその存在が希薄で精一杯中高時代に還ろうとして背伸びする顔々、顔ばかりが写っていた。

予定したように京都駅四時着解散。昨夜確認された七夕よりも一カ月早い、毎年六月の第一週、月曜日の再開を期して、授業料というささやかな投資で得た生涯の宝者は、それぞれの生活の根城に、あの顔で帰って行った。ともあれ暫くは、また会いたい症候群に噴まれるのである。

（藤井知生）

上高卒五十周年　熟年パワー爆発（高五回）

集まりも集まったり、案内状発送の三分の一をはるかにうわまわる会員が集まった。十月三日、四日、今年は上野が当番の年、ちょっと遠出をと言うとこで、「プライムリゾート賢島」、スペイン風の白い瀟洒なホテルに集まったのは、男子五十八名・女子四十一名の熟年パワー。ものすごい熱気であった。記念撮影をし、物故会員に黙祷を捧げたのち、松下任久君の「伊賀市迷走記」と題して新上野市名について上五会が展開した署名運動の報告がなされ、矢谷隆一君の乾杯の音頭で、宴会

がはじまった。

わいわいがやがやホテルのバイキングに舌鼓をうちながら、歓談がはじまった。旧交をあたためるもの、近況を報告するもの、いつものことながら会話が弾んだ。席をたってお互いに交錯して、幼なじみのすぐにうちとけあえる仲間たちである。またたくまに二時間が立ち、あとは二次会となったが、部屋で仲間同士しゃべるものもあって自由解散した。また明日の所用のため名残を惜しみながら帰るものも何人かあって、次回の再会を約して別れた。

翌日はゴルフ組と観光組にわかれ、ゴルフ組十五名は「浜島CC」へ、すこし早くに出発。観光はバスで伊勢志摩スカイラインの風景を楽しみながら「金剛證寺」を見学、宗派を越えた柱のような卒塔婆のならぶ境内を見学して「おかげ横町」へ。「おかげ横町」で、伊勢名物「てこね寿司」と「漁師汁」を賞味して、しばらく自由散策のち再度バスに乗って「宇治山田駅」で解散。こころあたたまる楽しい二日間であった。

（上野幹事）

古希を迎えて（高六回）

平成十七年五月十四日、上高第六回卒業生五十周年同窓会を西明寺のウエルサンピア伊賀で開催しました。

卒業して半世紀、数え年の古希を迎える節目の年でもあり、都合に依り恩師の御出席をいただく事が出来なかったのは残念でしたが、海外からも参加され七十六名（男三十六名、女四十名）が一同に会しました。

先ず鬼籍に入られた恩師、そして三十一名の同期生に黙祷をささげました。乾杯の音頭は一番遠来の友にお願い致しました。

自己紹介の声もかき消される程に会場は賑やかに盛り上がり、全員での「ふるさと」の大合唱もありました。

二次会、三次会では玄人はだしのカラオケ名人達に一同びっくりするやら感心するやら。旧交をあたためているうちにあっという間に時が過ぎ後髪を引かれる思いの中散会となりました。

同期の桔梗屋さん特製のなつかしい伊賀銘菓、上高校章入りの「おしもん」をお土産に、その夜は五十年前にタイムスリップして定期試験の夢を見たに違いありません。

（文責・森中）

名古屋に集合（高八回）

二年に一回実施しております同期会も、今回は「自然の叡智」をテーマとする「愛知万博　愛・地球博」が開催されている名古屋で集まりました。

名古屋駅前にある「ホテルキャッスルプラザ」で正午より午後三時迄総数86名（恩師2名、卒業生84名）の方に参加頂き、和気あいあいと大いに話し合う機会を得る事が出来ました。九テーブルの各テーブルから一名近況報告をして戴いたり、みんなで「ビンゴゲーム」をして楽しく遊び、あっと云う間の三時間でした。二年後は津方面での同期会に元気で再開出来る事を約束し散会した次第です。久し振りに友と語り合った楽しい一時を良い想い出としてこれからの人生を生き生きと、健康で幸せに送って戴きたいと願っております。

（岡町博夫）

還暦を祝う同窓会（高十四回）

私たち第十四回生は三月二十日、ふるさと上野で、六年ぶりに同期会を開催しました。卒業後四十二回目この春は、全員が還暦を迎え、新たな人生のスタート地点に立つ春です。久しぶりに旧交を温め、お互いに六十年の自分の人生に乾杯しようということで、東京組が中心になって企画してくれた同期会に松岡先生、田中先生、泰羅先生の三人の先生方にもご出席いただくことができ、八十二名の同期生が集いました。

受付で旧姓の名札をつけた時から気分は完全に高校時代にタイムスリップし、懐かしい名前を呼び合い、再会を喜び合いました。参加者全員が一人ずつ今までの歩みや近況を交えた自己紹介をし終えた時には、開会から二時間を経過していました。あと十日で仕事から解放される人、これからも仕事に打ち込んでいく人、家庭人としてのキャリアを積んできた人、趣味やボランティア、外国語の勉強を始めた人など、歩む道はそれぞれですが、この六十年間を精一杯歩んできた自負がにじみ出ているようでした。

三人の先生方も、自分が七十・八十・九十歳となった時このようでいられたらどんなに素晴らしいかと思うほどお元気なご様子で、上高で教えていただいたのがついこの間のことのようで、思い出話に盛り上がりました。大雨にたたられた九州の修学旅行は忘れられないもので、「もう一度杖立温泉に行こう」との声も出て、たくさんの賛同の手が挙がりました。

案内が届いた時は、長いと思ったパーティも、談笑に花が咲き、あっという間に四時間が過ぎました。なつかしい校歌でお開きにしたものの、そのまま別れるのも名残惜しく、二次会にも大勢が詰めかけました。

今回参加した人たちはいずれも若々しく元気で卒業後四十二年の年月を感じさせない方ばかりでしたが、名簿をみると、すでに十六名の仲間が他界されたとのこと、残念でたまりません。今後はもっと短い周期で集まり、多くの方が参加できればと思いながら、次回の幹事を大阪組にお願いしました。

（平井澄子）

各支部・各年次などで行われた同窓会の紹介原稿（四〇〇字程度）を事務局までお寄せ下さい。

同窓会名簿発行にご協力を

同窓会名簿を全面改訂して、平成18年発刊に向け準備作業を進めます。各地で市町村合併等により郵便番号、電話番号、新住所表示等相当に変更されています。ぜひ全会員の正確な情報を把握するため、調査にご協力下さい。

東京支部第21回新卒業生歓迎懇親会に参加して

去る六月四日（土）、同窓会東京支部恒例の新卒業生歓迎懇親会（第21回）が、東京都内の三笠会館にて開催されました。今回は、旧三学年担任団の代表ということで参加しました。

卒業から三ヶ月が経過し、新生活の軌道にうまく乗り出してきた頃だろうかという思いを抱えながら、会場に向かいました。到着して開会までの間、一人二人と明るい笑顔でやってくる卒業生を目にして、慣れない新生活を送りながらも前向きに頑張っているんだなという印象を受けました。中には、制服姿しか知らない私には、遠目に見ていると、現れた若者が誰なのかすぐに思いあたらないという場面もありましたが、懇親会が始まり言葉を交わすと元気に近況を語ってくれる姿に、高校在学時の伸び伸びとした屈託のない表情が思い出され、その懐かしさにホッとするとともに、それぞれが見知らぬ土地で一歩一歩自分の道を歩んでいると実感しました。また、後輩達や、最近の学校の様子を気にかけてくれたり、自分の将来について力強く語ったりと、頼もしくも思えました。

懇親会の後半では、新卒生の自己紹介を兼ね、くじによるプレゼントの贈呈が行われました。パソコンの記憶メディアやクリアファイルなど、大学での学習に役立つ小物ばかり、卒業生もおおいに活用してくれることと思います。このように温かく迎えて頂いたことを胸に、自分の未来を見事切り開き活躍することで、先輩方に恩返しをしてくれることと信じ、後に続く後輩達のためにも夢を諦めない姿勢を見せつづけてくれるものと期待します。

私ごとですが、自分自身も上野高校を卒業し、大学時代を東京で過ごしており、この歓迎会にも呼んで頂いた経験があり、その頃生まれたばかりの卒業生が今こうしてこの場にいて、同じ時間を別の立場で共有しているということに、随分時間が経ったのだなとしみじみと感じ入りました。

（服部秀一・高38回）

▲歓迎を受ける新卒学生の面々

伊藤たかみさん（高41回）芥川賞候補に

若手作家、伊藤たかみさん（本名伊藤学）が「無花果カレーライス」（「文藝」夏号）で第133回（本年度上半期）の芥川賞候補の一人に選ばれた。今回は受賞を逃したが今後の受賞に期待がかかっている。

伊藤さんは95年、早大在学中に『助手席にてグルグル・ダンスを踊って』で「文藝賞」を受賞して以後、次々と斬新な作品を発表して注目されていた。最近作は、本格的長編『盗作』、思春期の世代を描いた『ミカ』、『ぎぶそん』など。

平井 堅君（高41回卒）は昔と変わらなかった

▲恩師 吉永昌平先生〈高11回〉と

去る5月17日全国コンサートツアーの最初の地を伊賀上野からスタートさせた平井堅君はいまや押しも押されぬメジャーアーティストである。ところがコンサート終了後、疲れも見せず昌平組（1−4）ミニ同窓会に駆けつけてくれた彼は昔と変わらぬ飄々とした「堅くん」であった。

北泉優子（高7回）初エッセイ集

「忍ぶ糸」の原作者北泉優子さんの初エッセイ集が刊行されました。筆者が伊賀上野に帰郷してからのあれこれを豊かな感性で綴られています。新書判二一六ページ、頒布価格一〇〇〇円。

問い合わせ
伊賀市文化都市協会
電話0595−22−0511